

どのような暗闇にも

大学宗教センター長 栗原 健

<sup>1</sup>そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。<sup>2</sup>これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。<sup>3</sup>人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。<sup>4</sup>ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。<sup>5</sup>身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。<sup>6</sup>ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、<sup>7</sup>初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

<sup>8</sup>その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。<sup>9</sup>すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。<sup>10</sup>天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。<sup>11</sup>今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。<sup>12</sup>あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」<sup>13</sup>すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

<sup>14</sup>「いと高きところには栄光、神にあれ、

地には平和、御心に適う人にあれ。」

<sup>15</sup>天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。<sup>16</sup>そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。<sup>17</sup>その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。<sup>18</sup>聞いた者は皆、羊飼いたちの話をもて不思議に思った。<sup>19</sup>しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。<sup>20</sup>羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりにだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

ルカによる福音書 2 章 1 節-20 節

今年もいよいよ、イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスになります。さまざまなことがあった一年でしたが、今ひとときは心を煩わすものを忘れ、聖書に示された神の愛に心を向けたいと思います。

今日読んだ箇所は、私たちにとって馴染み深いクリスマスの物語です。この話を

聞いて、どのようなイメージが湧いたでしょうか。おそらく、馬小屋で動物たちに囲まれてスヤスヤと眠る赤ん坊のイエス。夜空で歌う天使たち…というように、メルヘンのような光景が思い浮かぶことと思います。

けれども、それは本当にイエス誕生のシーンだったのでしょうか。この話をよく読むと、実際の場面は、そのようなあたたかな姿とはほど遠いものであったことが分かります。実はその厳しい現実のほうにこそ、私たちに注がれている神の愛、私たちに与えられている希望が示されているのです。そのことを見てみましょう。

今日の箇所は、ローマ皇帝が全領民に向かって「人口調査をするから登録せよ」と命じた、ということから始まります。当時、パレスチナはローマ帝国によって植民地にされており、人々は重い税金をしばり取られて苦しんでいました。住民登録とは、もっと漏れなく税金を取るために民の数をチェックするということですから、ユダヤの人々にとっては実に憎らしいものでした。そのような命令のために大きなお腹を抱えて旅をすることになったのですから、マリアにとって気が重いことだった筈です。

ようやくベツレヘムに着いたマリアは、にわかに産気づきます。貧しいヨセフとマリアには、泊めてくれる宿屋もありませんでした。「彼らのいる場所が無かった」とハッキリ書いてあります。誰も助けてくれない。困ったマリアたちが這い込んだのは、家畜小屋でした。

この小屋は、私たちが想像するような木造の建物ではなかったはずですが、樹木が豊かではないパレスチナには、木造建築はあまり造れません。そのため、人々は崖の下にある洞窟などに家畜を入れていました。マリアが入ったのもそうしたほら穴だったのでしょう。暗くて寒い、泥だらけの、家畜の糞で汚れた場所だった筈ですが、そのような暗闇の中でイエスは生まれたのです。

飼い葉桶も同様に、木で出来たものではなかった筈です。今でも中東にあるように、上部を平らに削った岩であったと考えられます。家畜の唾で汚れている冷たい石の上に、イエスは、ありあわせの布に巻かれて寝かされました。

ついでながら、マリアが天使の歌を聞いたとは聖書には書かれていません。歌を聞いたのは羊飼いたちであって、マリア自身は、真っ暗な洞窟の中でぐったりしていたことになります。現代で言えば、行き場のない女性がどこかの裏道の物置で出産し、手持ちのＴシャツで赤ん坊をくるみ、積んであった新聞紙の束の上に置いた…という感じの光景です。メルヘンのかけらもありません。

一体なぜ救い主であるイエスが、このような状態で生まれたのでしょうか。不思議なことに、今日の箇所で天使は羊飼いたちに向かって、「飼い葉桶の中に、赤ん坊が寝かされている」、これこそが「あなたがたへのしるし」なのだ(12節)と言っています。「しるし」ということは、「これは神様の特別なメッセージだよ」ということです。なぜイエスがこのような所で生まれたことが、私たちへのメッセージになるのでしょうか。そのメッセージとは何なのでしょう。

それは、「私たちの人生の中のどれほど暗い場所、辛いところ、見苦しいところにも、

イエスは入って来て下さる」ということです。

人生の中では時として、辛い時、何もかもうまくいかない時、希望を持ってないように思える時期があります。そのような苦しい時、私たちは、「ここには神様なんていない。暗闇しかない」と感じるかも知れません。けれども忘れてはならないことは、イエス自身がそのような「暗闇しかない」場所、「何もかもうまく行っていない」ように見える状態で生まれられたということです。

このことを通じてイエスは、私たちにこう語りかけてくれます。「あなたがどれほど苦しい時、全てがぐちゃぐちゃになったように思える時でも、私はそこに一緒にいる。どれほど暗い場所でも、神の愛が届かないほど遠い場所は、この世界には存在しない。あなたは絶対にひとりぼっちではない。」このイエスの思いが、今日の話に示されているのです。

私たちはしばしば、清らかで美しいところにしか神はいないと思いがちです。そのために、自分の中に妬みや恨み、さまざまな欲や不満といった自分でも見たくないものを見ると、「こんな自分のところには、神は来ない」と思います。けれども、汚い家畜の穴で生まれ、十字架という最も苦しい形の死にまで赴かれたイエスは、そのような場所にも来て下さいます。

私たちが抱える暗闇は、時としてもっと漠然とした、日常的なものであることもあります。例えば、大勢の人に囲まれて楽しくしているのに、誰とも心が通っていないように感じる。自分は独りだと思う。自分はいてもいなくても同じなのではないか。この世界に、自分の居場所はあるのだろうか。そうした不安や孤独感を突然感じることはないでしょうか。クリスマスの時期のように、みんながにぎやかにワイワイ過ごしている時には、一層寂しい気持ちになるかも知れません。

そのような暗闇にもイエスは入って来られ、「私はあなたと共にいるよ」と語りかけて下さいます。なぜなら、イエス自身、「いる場所がない」状態でこの世に来られたからです。「私も居場所がなかったのだ」とイエスは言われるでしょう。

もちろん、自分がこうした苦しみにある時には、イエスが一緒にいるなんて信じられないことが普通です。けれども、後になってその苦しかった時期のことを振り返ってみると、「確かにあの時、自分は何かに支えられていた」と思えることが、しばしばあります。このことが分かって来ると、苦しい時期、暗闇の時というのも確かに自分の人生の一部なのだ、それもまた、神のもとへと立ち返って行く自分の道のりの一部なのだと気がつくことができます。

このように、家畜小屋から十字架までの苦しみをなめた後に復活されたイエスだからこそ、私たちのどのような暗闇をも理解して下さり、罪の縛りから救い出し、新しい人生へと導くことができるのです。クリスマスのお話はこのことを示しています。この希望があるからこそ、私たちは勇気をもって歩いて生きて行くことができるのです。来たる 2025 年もこの愛の約束を心におぼえ、しっかりと進んで行きましょう。 (2024年12月23日)